

中級レベルにおけるノートテイキングの授業

発表者：大手山 藍衣子・黒崎 亜美（ラボ日本語教育研修所）

1 はじめに

日本語教育の実践研究において、ノートテイキングを扱うものは非常に少ない。口頭発表の補助として有効なレジュメを作成する実践の報告（田中 2008）などはあるが、音声情報を取り扱うものはない。しかし、大学・大学院、また専門学校などに進学する学習者はもちろん、就職する学習者などにとっても、音声情報を記録する目的でノートテイキングを行うという言語行動は非常に重要なものであり、また、これは決してアウトプットのみに注目した活動ではないと考えた。そこで、本稿では、中級の学習者を対象に、音声情報を文字化・図式化できるようになることと、思考の論理的トレーニングを目標として行っている「メモ・ノート」の授業について、実践内容を報告する。

2 先行研究

Nation & Newton (2009) は、第二言語習得において、音声情報を文字情報に転換する (Information Transfer) のは、その処理過程において非常に重要であり、ノートという新たな形にまとめなおす活動を、習得の有効な手段として提案している。彼らの実験で、聴解もしくは読解で得た情報に対して、Information Transfer を行った、つまり Note-taking の活動を行ったグループが、行わなかったグループよりも、より深い情報内容の処理が行なわれているという。

このことは、Note-taking は、記録する・伝達するといったアウトプットのスキルとしての効果だけではなく、第二言語習得そのものに働きかける、有効なトレーニングであることを示している。

3 実践報告

3.1 クラスの概要

授業は、平均学習時間 600 時間程度の学習者（2010 年 4 月からのクラスは、バングラデシュ人男性 2 名、韓国人男性 1 名、韓国人女性 5 名、ミャンマー人女性 1 名、中国人女性 1 名）で行った。日本語能力試験 2 級を目指すレベルである。授業は 3 カ月で、90 分授業を 6 回（計 9 時間）、およびテスト 1 回を実施した。

3.2 授業の概要

3.2.1 授業の目的

本機関で行っている「メモ・ノート」の授業目的は、3 つある。

- 1) 「メモ」と「ノート」の違いを理解する：授業を行うに際して、次の点を定義づけた。

①メモは、音声情報を書き留めておくもので、整理を目的にしないので母国語でも構わない。

②ノートは記録として残るもので、長時間経過した後に自分が見て分かること、また、他者が見て、もとの音声情報を再生できることが重要である。
これらを授業内でのルールとして定めた。

2) ノートの型となるものを学習し、適宜使用できるようになる：ここでいう「型」とは、その談話が持つ機能をまとめる際に、その機能が際立ち、わかりやすいノートのスタイルのことをいう。今回のこのクラスでは「時間軸で整理するタイプ」、「手順を示すタイプ」、「比較して整理するタイプ」などを授業内で紹介した。

それぞれの「型」には、整理するのに便利な技能がある。例えば、「手順」では数字の使い方、「比較」では表の使い方などである。これらの技能を修得することが各回の授業での大きな目的となる。

3) 音声情報から、どの「型」でまとめることが適切であるかを判断できるようになる：音声情報を聞いた上で、その談話がどの機能を持つものなのか、またそれらをどの技能を使って整理するとよいかを判断できることを目標とした。また、それをノートの形式にまとめることができる、ということを最終目標としている。

3.2.2 各授業の流れ

授業の大まかな流れは、以下のとおりである。まず、最初の導入としてその日に取り上げる「型」や技能を学習する。教師のモデル提示の後、練習を行い、最後に実践課題を提出してもらう。音声情報は1～8分程度のものを2回聞かせ、その内容をA4で1枚程度のノートにすることを課題とした。音源は、主にテレビ番組を使用した。

映像内の固有名詞や使用頻度が低い語彙についてはルビをふってシートに記載した。

翌週、全員分のノートを縮小コピーして一覧にしたものを作成し、まずノートの形として適切なものになっているかを確認。その後で、内容の情報に誤りがないか、また情報の過不足がないかを確認するために、VTRのナレーションの部分を文字化したものを配布し、文字情報とノートの内容が合っているかどうかFBを行った。

3.2.3 授業の概要

授業は、2010年4月から6月までの計6回（1回60～90分）行った。各回の詳細は以下のとおりである。

■第1回：ノートの基本を学ぶ： 「ノート」と「メモ」の違いを教師のモデルで理解する。さらに、タイトルをつける・ノートの左端を意識する・体言止めで書く、といったノートテイキングにおける基本技能を学習する。最後に、実践としてVTRを2回見て、A4半分サイズのノートを完成させる。（課題の実践方法は以下同様）＊使用VTR：「牛乳パックを使った再生利用商品『紙ハンガー』」（「エコラボ」フジテレビ・1分）

■第2回：項目を複数たてて整理する： 第1回で学習した「項目」を複数たてて、ノートを整理する。導入練習として、ごく短いVTRを視聴し、学習者は各自自由にノートを書く。その後、クラス全員分を見て共有。ここで着目する技能は数字の使い方である。大項目番号には「1」「2」を使用し、さらに細かい商品名には「①」「②」を使

用する。数字の使用順位には、I → 1 → (1) → ①というルールがあることを学習する。その後、最初のものよりやや長いVTRを視聴し、ノートにまとめる課題を実施した。

*使用 VTR：「Tokyo Hit Clip」よりコンビニの新商品紹介（「ズームイン!!SUPER」日本テレビ・3分）

■第3回： 時間軸で整理する： ある事件を時系列に整理した教師のモデルノートを見て、内容を推測し、時間について整理したものであることを理解する。練習では300字程度でまとめた文章を教師が読み、メモを取った上でA4半分サイズのノートを完成させた。時間を表すもの（年号等）は時系列順に上から下へ並べ、出来事をまとめて整理することを学習する。学習者2名にホワイトボードに板書してもらい、クラス全体で共有した。その後、VTRを視聴し、ノートにまとめる課題を実施した。*使用 VTR：「スニーカーの歴史」（「世界まる見え！テレビ特捜部」日本テレビ・5分）

■第4回： 手順を示す： 手順とは別に、注意点や補足情報などを差し込み情報として整理することに留意する。導入練習では、ペアで「カップラーメンの食べ方」マニュアルを作成。この際に、言葉を短くまとめる方法・体言止め、また差込情報の入れ方について、をクラスで共有した。その後、VTRを視聴し、ノートにまとめる課題を実施した。*使用 VTR：「家庭でできるシミ抜きの方法」（「ためしてガッテン」NHK・6分）

■第5回： 比較する： 導入練習として、「比較」の構成を持つ短い文章を教師が読み、学習者はそれをノートにまとめる。クラス内でそのまとめ方を板書で共有する。ここで表の使用が比較には効果的であることに気づかせる。その後、VTRを視聴し、ノートにまとめる課題を実施した。*使用 VTR：「丸の内ビルと新丸の内ビルのひんやりスイーツ紹介」（「ズームイン!!SUPER」日本テレビ・7分）

■第6回 複合型：時間軸+手順： この回では新たな導入は行わず、ここまでで学習した「型」を2つ以上使用してノートを完成させる練習であることを伝える。今学期学習した内容を思い出し、その後、VTRを視聴し、ノートにまとめる課題を実施した。

*使用 VTR：「ケンタッキーフライドチキン」（「シルシルミシル」テレビ朝日・8分）

■テスト： *使用 VTR：「日本で生まれた洋食」（「知っとこ！」TBS・8分）

3.3 評価

授業内で学習者が提出したノートは、表1下のように評価した。

「課題」では、毎回のテーマとなっている技能が正しく効果的に反映されているかを評価した。したがって、この内容は回によって変わる。例えば、

初回ではノートの基本ルール「項目が立てられているか」、手順のノートであれば「数字が使っているか」、比較のノートでは「表が使っているか」などである。

表1. ノートティキング 評価表

	評価項目	配点	合計
課題 (5)	例) 項目が立てられているか 表が使っているか	5・4・3・2・1	
構成 (10)	並べ方はいいか	5・4・3・2・1	
	項目と内容の関連性はあるか	5・4・3・2・1	
内容 (10)	情報量は十分か	5・4・3・2・1	
	正確さがあるか	5・4・3・2・1	
表記 (5)	文字表記・文法ミスはないか	5・4・3・2・1	/30

3.4 授業考察

今学期は全6回、実際にテレビ放映されているVTRを使用した。全体としては、回を重ねてVTRの音声情報が多くなるほど、視聴しながら取るメモの分量に大きな差が見られた。来日して間もない中国人女性は、最初の3回は非常に音声の聞き取りに苦労していたが、次第にそのスピードにも慣れていった。一方、バングラデシュ人男性二人は情報量が増えるに従って細部情報に漏れが多くみられた。ノートとしての形は整っているものの、内容としての情報は不足しがちであった。音声の聞き取り能力の不足に加えて「メモする」という行為自体に抵抗がある、という文化差の影響も考えられる。

ノートの完成度には聴解力だけでなく、読解力が大きく影響しているのではないかと考える。個々の学習者の読解力の差が、ノートの完成度にもっとも顕著に現れたのは、「型」が複数になったときであった。読解における文章の機能を見つけ出す能力が乏しい学習者にとっては、音声情報の機能を理解し、ノートの「型」に結びつける、ということが難しかったようである。それに比べて、読解力がある学習者にとっては、機能を理解することも、またそれをノートに反映させることにもそれほど困難を感じていないようだった。

また、3ヶ月の期間でノートそのものの完成形にも変化が見られた。学期の始めは、ただ情報を羅列していくだけだった学習者も、「人に見られる」ということの意識によっていくつかの工夫が見られた。余白の効果的な使い方、字の大きさ、見出しなどの強調、矢印や記号の使い方などである。さらに、ノート全体の割付を最初に考えてその枠内で收めようと工夫している学習者も見られた。

4 まとめ・今後の課題

「ノートテイキング」は、大学・大学院に進学する学習者にとって、重要な学習スキルである。しかし、これを“スキル”ではなく、言語を受容する処理過程としてとらえることで、「聞く」「書く」の能力のみならず、「読む」能力との関係もあるのではないか。これは、読解力がノートテイキングに影響を与えること、またノートテイキングそのものが読解の情報処理能力に影響を与える、双方向の効果を考える。

本稿では、授業の効果の実証などは行っておらず、あくまでも一提案である。しかし、今後、追跡調査を行い、これらの技能を学習者が実際のどのような言語活動の中で使用していくのかを観察しようと考えている。また、ノートテイキングの授業の結果が、聴解、読解、ライティングそれぞれの能力にどのように影響を与えているのかを測定する必要があるだろう。

【参考文献】

- 田中真寿美（2008）「新聞の人物欄を用いた発表およびレジュメ作成の試み」『日本語教育方法研究会誌』vol. 15, 20-21
Nation, I. S. P. & Newton J. (2009) *Teaching ESL/EFL listening and speaking*. Routledge, Taylor & Francis.